

バークの政界登場とロッキンガム派弁護論（II）

岸 本 広 司

Burke's Political Debut and His Defense of the Rockingham Party (II)

Hiroshi Kishimoto

目 次

- 一 第一次ロッキンガム内閣の成立とバーク
- 二 政界登場（以上第22号）
- 三 チャタム内閣の成立とバーク（本号）
- 四 『「現在の国情」論』（次号）

Summary

After the resignation of Grafton, the Rockingham Ministry began to disintegrate. George III sent for William Pitt to form a new Administration. The King had come to believe that Pitt's leadership could give him a secure government. Pitt took the Privy Seal and was created Earl of Chatham. It was his plan to form an Administration which should transcend and obliterate party divisions, and to direct it by remote control from the House of Lords.

On 30 July 1766, the Rockingham Ministry left office, and the Chatham Ministry was formed. After the dismissal of the Rockingham Ministry, Burke could afford to seek for an appointment in the next ministry. But he decided to remain in the Rockingham Party and contributed to the Party. In this paper I propose to clarify both what Burke thought of and how he behaved about the time when the Chatham Ministry was formed.

Received Sep. 12, 1991

Key Words : Edmund Burke, the first Rockingham Ministry, the Chatham Ministry.

三 チャタム内閣の成立とバーク

印紙条例の撤廃は、ロッキンガム内閣の最大の成果であり、我々はこの内閣をしばしばこれ一点のみで記憶している。しかし言うまでもなく、ロッキンガム内閣の事績はこれにとどまるものではなく、その短い政権担当期間中に、その他幾つかの業績を上げていることは歴史が明らかにしている通りである。例えばバークは、内閣が崩壊した直後に著わした『前短期政権についての短評』(A Short Account of a Late Short Administration, 1766)において、ロッキンガム内閣の功績を称えて次のように述べている。

「前内閣は、カンバーランド公の仲介によって1765年7月10日に成立し、ちょうど1年と20日続いた後、チャタム伯の立てた計画に基づいて1766年7月30日に退陣した。この期間中に、イギリス帝国の騒乱はアメリカの印紙法撤廃 (the Repeal of the American Stamp Act) によって鎮められたが、グレート・ブリテンの憲法上の優位は、各植民地の従属を確保する条例 (the Act for securing the Dependence of the Colonies) によって維持された。また、私人の家々は林檎酒税の撤廃 (the Repeal of the Cyder Tax) によって消費税の負担から解放され、臣民の個人的自由は一般逮捕状の無効決議 (the Resolution against General Warrants) によって確認された。さらに事務や友情の合法的秘密も、文書の押収を非難する決議 (the Resolution for condemning the Seizure of Papers) によって守られた。そしてアメリカ貿易は、関税の廃棄、および本国とアメリカにおけるブリテン植民地の通商を奨励・規制・保全する条例 (the Act for repealing certain Duties, and encouraging, regulating, and securing the Trade of this Kingdom, and the British Dominions in America) によって愚かで破壊的な課税を免れることができ、その結果、収入が増大して合理的な根拠の上に据えられるとともに、その通商は諸外国にまで広がったにも拘らず、あらゆる利益はグレート・ブリテンの手に確保された⁽¹⁾。」

そしてさらにこれに続けてバークは、ドミニカとジャマイカの港湾開港条例 (the Act for opening certain Ports in Dominica and Jamaica) によって貿易が一層拡大されたこと、国内各地で商人の集会や協議が計画され奨励されたこと、官職の売買を禁止して政治の腐敗を阻止したこと等々も、ロッキンガム内閣の重要な政治的成果として取り上げながら、その事績を誇らしげに列挙しているのである⁽²⁾。もっとも、バークのこのパンフレットはロッキンガム内閣の功績をいささか過大に評価しているきらいがあり、したがってこれを読むに際しては、若干の注意が必要であろう。しかしロッキンガム内閣が、印紙条例以外にもそれ相応の成果を上げたことは疑いなく、とりわけ一般逮捕状の無効決議は、この内閣のリベラルな側面を示すものとして見逃すことはできないのである。

しかしながら、植民地問題においても国内問題においても、穏健でリベラルな政策をとったロッキンガム内閣は、まさにそうした政策そのものが、バークが言うように「グレンヴィ

ル内閣の建造物（Grenvillian Fabrick）をことごとく破壊する⁽³⁾」ものであったが故に、グレンヴィルとその友人たちから激しい攻撃を受けざるを得なかった。しかもロックンガム内閣は、ロックンガム派のみで構成されていたわけではなく、閣内にはピットの影響下にあるグラフトンや、国王やビュートの影響下にあるエグモント、バリントン、ノージントンといった人々がいた。そのため閣内不統一に陥ることもしばしばで、その都度ロックンガム内閣の脆弱さを露呈したが、首班であるロックンガム自身、閣僚の意見を調整して全体をまとめ上げるだけの強いリーダーシップに欠けていた。否そればかりか、すでに本稿第一節でも述べたように、彼は病弱で行動も緩慢であり、実際の政治的経験はもとより、人を説得する華麗な雄弁の才も、政策を立案し、それを実行する国政担当者に不可欠な能力も十分に持ち合わせてはいなかった。そのことは、次のリッチモンド公（3rd Duke of Richmond）の評言からも窺い知ることができる。「ロックンガム卿の傾向は、何事にも常にぐずぐずしていることと、計画をあまりにも細かく立てすぎて、希望していることを実行することができないということである。彼はやる事がいつもあまりにも遅いので、多くの好機を失ってしまっている⁽⁴⁾。」

政治家としては決して有能とは言えぬこのような人物に率いられ⁽⁵⁾、しかも若くて経験不足の者が多かったばかりか、ピットという「礎石⁽⁶⁾」なしに構成されているこのロックンガム内閣は、人材不足と基盤の弱さの故に、ジョージ三世から「子供の内閣⁽⁷⁾」と嘲られるほどにその信頼を失っていた。そのため、「主人である国王から信頼されていないので、現政権は長く存続することはできないだろう⁽⁸⁾」というのが一般的な受け取られ方であった。事実、この内閣は国王の信頼を欠いて長く存続することはできなかったが、ロックンガム内閣を急速に弱体化させ、王や世間の信頼を決定的に失わせるその最大の契機となったのは、北部担当国務大臣グラフトンの辞任であった。すなわち、以前から内閣の弱さを自覚し、ピットの助力を仰ぐべきことを主張していたグラフトンは、結果的に彼の協力が得られないことを知るや、1766年4月27日にロックンガムとコンウェーに、翌28日にはジョージ三世に辞任の意向を伝えたのである⁽⁹⁾。そしてその報が世間に広まるや、政府に対する人々の信頼感は一挙に失せて、内閣の崩壊近しという観測が一気に流れたのであった。ジョージ三世が、内閣の更迭について具体的に考え始めたのもこの時からである。「グラフトン公が辞職するや否や、余は、どのようにすれば有能な内閣を組織することができるのか、また、どのようにすれば現内閣を最善の方法で退陣させることができるかと考えるようになった⁽¹⁰⁾。」

グラフトンの辞意表明⁽¹¹⁾は、ロックンガム政権に動揺と混乱をもたらさざるにはおかなかった。5月になると、海軍財務長官R・ハウ（Richard Howe）も——言うまでもなく彼は、アメリカ独立戦争の時にイギリスの提督として弟ともども活躍した人物である——、グラフトンと同じ理由でその職を辞している⁽¹²⁾。グラフトンの辞任は、単に彼一人だけの問題ではなく、ロックンガム政権をまさに根底から揺さぶるものとなったのである。なるほど、政

府は直ちに後任者の人選に入って危機的状況からの脱出を試みている。しかし、すでに「死に体」となってしまった政府の要請を受ける者などほとんどいないというのが実情であった⁽¹³⁾。難航した末に、グラフトンの後任には南部担当国务大臣コンウェーが横滑りし、コンウェーの後任には前出のリッチモンド公が新たに就任して、一応の体裁が整ったのは5月23日のことであった。けれども、このようにリッチモンドの入閣を見ながらも、それは政権の強化に何ら繋がるものではなく、むしろ王の機嫌を損ねただけであった。というのも王は、リッチモンドは才能も経験もなく、人柄も良くない全くの不適任者と考えていたからである⁽¹⁴⁾。彼の入閣に一役買ったH・ウォルポールは、この一件によって王と政府の関係が決定的に悪化し、やがて内閣崩壊に向かったとして次のように述べている。「リッチモンド公に対して王は好意的ではなかった。実際、彼のために獲得した国务大臣の椅子は、内閣を瓦解へと向かわせる非常に大きな要因となった⁽¹⁵⁾。」

ジョージ三世の内閣更迭の腹は決まった。カナダのケベック統治をめぐる他の閣僚と口論したノージントンが、7月初めに大法官の職を辞した⁽¹⁶⁾ことが国王の決断を一層促した。ところで、ロッキンガムの後継首班としてジョージ三世の意中の人物は、1年前の時と全く同様ピットであった。もっとも国王は、ピットに好意を抱いているわけでは決してなかった。しかしより安定した政権を求める国王にとって、あらゆる党派の解消を目指し、しかも「偉大な平民」(the Great Commoner)として国民の圧倒的な人気を誇っているピットの存在を無視することはできなかつたし、むしろピットこそが、そうした企図を実現する上に最も打ってつけの人物と思われた。それ故今や国王のなすべきことは、「ピット氏が実際首相になりたいと思っているのかどうかを、ある程度確実に知るための時間を確保する⁽¹⁷⁾」ことであった。そこで国王は、ピットの意向を知るために、「有能で威厳のある内閣はどのようにすれば作ることができるのか、貴公の見解を承りたい⁽¹⁸⁾」と記した書簡を、7月7日にノージントンを通じてピットに送った。それを受け取ったピットは、感謝と感激の気持もあらわに直ちに参上する旨述べた返書を8日に認め⁽¹⁹⁾、翌9日に国王に送った。これによって、ピットの組閣とロッキンガム内閣の退陣が事実上決まった。そして同日、国王はロッキンガムと閣僚たちにそのことを伝えて引導を渡したのであった⁽²⁰⁾。内閣が成立してちょうど1年目のことである。H・ウォルポールは、翌7月10日の知人宛書簡で、この辺りのことを簡潔にこう述べている。「内閣は昨日で丸1年経ちました。そしてこの内閣は、昨日最後を迎えました⁽²¹⁾」と。

こうしてロッキンガム内閣は瓦解し、7月30日の正式な退陣を受けてピットの率いる新内閣が成立した。実力者ピットを中心とするかつてなく安定した内閣であることが予想され、また期待された。事実、ピットは当代一の雄弁家であり、その能力は国会と国民の指導者として比類なきものであった。彼は公正な政治家として人々から敬愛され、情熱的でありつつ孤高を持し、しかも常に劇的雰囲気漂わせながら、威圧するかの如き風采で大向こうを唸らせることのできる稀有な人物であった⁽²²⁾。しかし鳴り物入りで成立したピットの内閣も、

国王や世間の期待に応えることができず、結果的には完全な失敗に終わった。その理由として考えられるのは、まず第一にピットの人気の凋落である。すなわち、首相就任直後の8月に、彼はチャタム伯（1st Earl of Chatham）に叙せられて上院に列し、三代にわたって3000ポンドの年金を受けることになったが、これは国民の眼には裏切りと映じ、人気失墜の決定的な原因となったのである。「その偉大な貴族〔ピット〕には、まだ若干の人気(a little twilight of popularity)が残っています。しかしそれは刻々と失われつつあります⁽²³⁾」と、パークは8月21日付ロッキンガム宛書簡で語っている。もっとも、ピットのこうした授爵や年金受領は野心や名誉心や利己心の故ではなく、持病である痛風が昂進したために、下院での激しい論戦に臨むのはもはや不可能と悟り、自身は国璽尚書となって上院に議席を有することによって、そこから内閣を指導しようとしたのであった。したがって、ピットの行動そのものは彼の深い計算によるものであるが、しかし国民の人気を落としたことは大きな誤算であり、新政権にとって大きなマイナスであった。けだし政権の安定度は、国民の人気度と大いに関わっているものだからである。

ピットの内閣、すなわちチャタム内閣が失敗に終わったいま一つの理由は、安定政権を最大の目標として掲げながらも、ロッキンガム内閣と同様に、統一性を欠いた不安定な政権であったということである。すでに述べたように、チャタムはあらゆる党派を嫌ってその解消を目指していた。「各党派から優秀な人材を選び抜いて、できるだけすべての党派を粉砕する⁽²⁴⁾」ところにチャタムの意図があったのである。そして彼自身の言うところに従うならば、良き「内閣は、党派や身分、あるいは縁故とは何ら関係なしに、最良かつ最も優秀な人たちによって組織され得る⁽²⁵⁾」のであった。しかしこのような理念に基づいて組閣されながらも、あるいはむしろそうであるが故に、実際に出来上がった内閣は、さまざまな立場の政治家たちから成る「市松模様のように極端に入り組んだ内閣⁽²⁶⁾」であったし、またその構成員も、「最良かつ最も優秀な人たち」では決してなかった。その点で、チャタム内閣はロッキンガム内閣とさほど変わらず、ウォルポールが政権交代前からすでに予想していたように⁽²⁷⁾、閣僚の顔ぶれさえもが、前内閣のそれとあまり異なるものではなかったのである。例えば、グラフトン、コンウェー、バリントン、ノージントンは、それぞれ第一大蔵卿、北部担当国務大臣、陸軍大臣、枢密院議長として、また支払総監の地位にあったC・タウンゼンド（Charles Townshend）は、大蔵大臣として残留したのである⁽²⁸⁾。したがって、チャタム内閣はいかなる点からしても新鮮味に乏しく、なにかんづく政権の安定性や統一性、および政策実現能力という点に関しては、寄り合い所帯的雑多性の故に、前内閣と同様あるいはそれ以上にさまざまな問題点を露呈したのであった。次に引用するのは、パークの有名なチャタム内閣批判である。彼は『アメリカへの課税に関する演説』の中で、チャタム内閣の雑多性が結局のところ閣内に混乱をもたらし、しかもそこからタウンゼンドの主導権掌握と、強圧的なタウンゼンド諸条例の制定が招来されたとして次のように語っている。長きにわたるが可能な限り引

用しておこう。

「チャタムは市松模様のように極端に入り組んだ内閣を作り上げた。彼はあまりにも縦横にはめ込まれ、気儘なまでに継ぎはぎされた一つの建具、多彩多様に象眼された戸棚、この上なく複雑な弁慶縞模様を、つまりここに黒い敷石が1枚、あそこに白い敷石が1枚というような、セメントづけなしの碁盤目形の舗道を作り上げたのである。愛国者と廷臣、国王の友と共和主義者、ウィッグとトーリー、二心ある味方と公然たる敵対者等々の寄せ集めであるこのモザイク模様は、明らかに極めて物珍しい光景ではあったが、しかし手に触れれば全く危なっかしく、足で踏むには全く頼りにならぬ代物であった。……………」

議長、このような配置の結果として、その政敵や反対者の大部分を自己の内閣の中に組み入れる羽目になったために極度の混乱が発生した。そして政策遂行面においても、彼自身の原理はほとんど何の効力ないし影響を及ぼし得ぬまでになった。その結果、もしも彼が痛風の発作に襲われたり、その他の何らかの原因で公的舞台から隠退せざるを得なくなった折などには、全く正反対の原理が必然的に支配的位置を占めた。自己の計画を遂行し終えた時に、彼は自らが抛るべき一片の地歩をも有しなかった。彼が自らの施政方針を実現した時に、彼はもはや一己の閣僚ではなかった。

ほんの一瞬の間でも彼の顔が見えなくなると、彼の内閣全体はさながら海図も羅針盤も持たぬままに漂流するに至った。彼の特定の味方である人々は、これまではそれぞれの省の責任者という名の下に、彼の下でめいめいに相応しい謙譲と、そしてたとえ時折行き過ぎたとしても、必ず彼の比類なき手腕によって正当づけられた彼への信頼に支えられて一定の機能を果たしたように見えていた。しかし、彼らは決していかなる機会においても自己の見解を確立していなかった。彼の指導力が一度失われると、彼らはあたかも疾風の中の漂流船の如く吹き流され、どの港へも容易に漂着する羽目となった。そして他方彼らと組んでその船を操縦してきた人々は、実は彼の意見、方針、性格とは正反対の連中であり、しかも乗組員の中で最も老獪にして最も有力な連中であつたため、彼らは容易に優位に立って、彼の古来の友人の今は主なき空いた心に付け入ってこれを占領し、たちまち船の針路を彼本来の針路から全く逸脱させてしまった。あたかも彼を裏切るだけで事足りずに、彼を侮辱せんとするもののように、まだ万事が彼の名において公的に美々しく遂行されていた彼の内閣の最初の会期が終了するはるか以前に、早くも彼らは、アメリカにおいて収入を調達することがこの上なく正当かつ得策であると謳い上げた法令〔タウンゼンド諸法〕を發布した。何となれば、議長、すでにこの時に早くも、つまりこの壮麗なる日輪がまだ完全には没し切らず、西の地平線がその落日の光輝に燃え立っている時期に、天の反対側からもう一つの星〔C・タウンゼンド〕が現われ、時満ちてそれが全天の首座星になったからである⁽²⁹⁾。」

この引用文からも明らかなように、チャタム内閣はその雑多性の故に閣内に混乱をもたら

し、チャタムの意図そのものとは全く異なる結果を招来してしまった。我々は、チャタム内閣におけるタウンゼンドの主導権掌握やタウンゼンド諸法の制定について、またチャタムの退陣やグラフトン内閣の成立等について後ほど見ていこうと思う。ここでは、大きな期待の下に成立したチャタム内閣が、結局のところ人々の期待に応えられず、前内閣と同様不安定な短命内閣に終わったということを述べておくにとどめておきたい。ところで、ロッキンガム内閣瓦解以降のパークは、一体いかなることを考え、いかなる行動をとったのであろうか。我々は、チャタム内閣に対するロッキンガム派の対応にも注目しつつ、この時期のパークを検討していこう。まず次の文章の引用から始めたい。

「1766年にウィッグが退陣した時、パーク氏が国内の他の人たちと同様、別な政治的結合（connection）を自由に選択できたことは多くの人々の記憶している通りである。当時、さまざまな経路を通して、チャタム伯との間で入閣交渉が非常に熱心に行なわれていた。しかしパーク氏は、それから身を引くために政権交代直後にアイルランドに渡り、議会開会まで戻らなかった。彼はこの時期、契約の如きものには何ら縛られていなかったし、また、友人たちの要求に縛られるということもなかった。けだし彼がアイルランドから帰ったその日に、ロッキンガム侯は彼に新内閣の下で官職に就くよう勧めたからである。もし官職に就こうと思えば就けたと思う。しかし彼は、喜んで自分の運命を再び党と共にしようと決意した⁽³⁰⁾。」

ここに引用したのは、自らの思想と行動の一貫性を弁明した晩年の著作『新ウィッグから旧ウィッグへの訴え』（*Appeal from the New to the Old Whigs*, 1791）の一節である。パークはここで、彼自身いかにロッキンガム派の人間として首尾一貫していたかを主張しているが、しかし注意すべきは、パークがロッキンガム派に忠誠を尽くして党と運命を共にするというを最終的に決意したのは、アイルランドから帰ってきた11月以降のことであって——この引用文にあるように、また我々も後述するように、パークは政権交代直後にアイルランドへ帰省し、そこで3ヵ月間あまり滞在していた——、11月以前のパークはそれほど明確な意識を持っていなかったということである。むしろロッキンガム内閣瓦解直後のパークは、新内閣の有力者たちと接触し、何らかのポストを得たいと考えていたのであり、そのために彼は、積極的な働きかけさえしているのである。パークが官職を強く求めていたことは、8月19日付のオハラ宛書簡からも明らかである。すなわちそこでは、新内閣から何の話もなかったこと、しかし国務大臣シェルバーンだけは例外で、アイルランドへ旅立つ前にパークの申し出を受け入れたいと考えていたこと、そのためパークは急いでシェルバーンを訪ねたが留守で、しかも何のメッセージもなかったこと、そこでコンウェーを二度訪問したが、ぞんざいに扱われたこと等々が悲しみと怒りの面持ちで述べられ、そしてさらに次のように語られているのである。「もしある家で主人が代わったとすれば、前の主人の下で働いていた従僕たちは、より一層配慮され思いやられることであらう⁽³¹⁾」と。

バークが新内閣に何らかのポストを求め、またそれを期待していたことは明らかである。確かにバークも言うように、さまざまな経路を通して入閣交渉が行なわれていたことは事実であろう。しかしそれは彼の希望に沿ったものではなく、結局バークは、何の官職も得られぬままにアイルランドへ渡ることになったのであった。つまりバークは、入閣交渉を嫌って「それから身を引くために」アイルランドへ渡ったのではないのである。むしろC・B・コーン(Carl B.Cone)が言うように⁽³²⁾、彼自身は入閣を熱望していたのであって、ただそれが成功しなかったにすぎないのである。したがって、この時期に「気違いじみた野心」などなく、仮にあったとしても、それはたいしたものではなかったとして、自らの行動の純粹さを訴えた1771年の有名なマークム宛書簡⁽³³⁾も、実は若干の疑問符を付して読まなければならないのである。

バークが妻と弟を伴ってアイルランドへ里帰りしたのは、正確に言えば政変直後の8月5日のことであるが、この時期バークがアイルランドへ渡ったのは、一つには、「自分自身の小さな問題⁽³⁴⁾」を解決するためであった。すなわち、約1年前に兄ギャレット(Garret Burke)が死去してバークにヨーク州クローガー(Clogher)の土地が遺されたが、その土地に関する問題を法的に片付けるためであったのである⁽³⁵⁾。政治家となって最初の里帰りであった。イギリス議会における彼の目覚ましい活躍はすでにアイルランドでも広く知られ、出身地ダブリン、姉ジュリアナ(Juliana French)の住むガルウェイ州ロフレー(Loughrea)、少年時代を過ごしたヨーク州バリダフ(Ballyduff)など、行く先々で私的にも公的にも盛大な歓迎を受けた。その辺りのことは、伝記作家たちが詳しく伝えている⁽³⁶⁾。彼は文字通り故郷に錦を飾ったのであり、母親メアリ(Mary Burke)が、嬉しさのあまりバークを褒めちぎった次のような息子自慢の書簡を認めたのも、バークがアイルランドに滞在していたまさにこの時期のことであった。「親愛なるネリー〔ヘネシー夫人〕、あなたは私のことをきっとひどい親馬鹿だと思っていることでしょう。しかしあなたも母親なのですから、その点についてはご寛恕願いたいものです。請け合って言いますが、エドモンドについて私を誇らしげにさせるのは、あの子に払われる栄誉ではなくしてエドモンドの心の良さなのです。あの子以上に気立ての良い人間はいないと思います。あんなに良い息子はいるはずがありませんし、エドモンドの妻ほど良い嫁もいないと思います⁽³⁷⁾。」

バークが3ヵ月間にわたる長い旅行を終えて、ロンドンに戻ったのは議会開会5日前の2月6日のことであった。先述したように、彼は新内閣の下で官職に就くことを希望し、そのための働きかけも行なっていた。しかし事は首尾よく進まなかった。もっとも、彼の存在が無視されていたわけではなく、アイルランドに渡って後も、その能力を評価して、入閣を勧める声は間違いなくあった。例えば、第一大蔵卿となったグラフトンは、バークがアイルランドに滞在していた10月17日、チャタムにバークを推薦してこう述べているのである。「バーク氏は、下院の中でもあらゆる点で最も役に立つ男だ。……彼は味方にすべきこの上もなく

重要な人物である⁽³⁸⁾」と。しかし、バークの官職就任は結局のところ実現せず、そのため彼は次第に反チャタム的となって、自らの運命をロックンガム派と共にしようとするようになった。そしてやがて新内閣からの申し出も、事実上断るに至ったのである。彼は友人オハラに、次のような書簡を送っている。

「私はロンドンに戻った直後、コンウェーから、彼と彼の仲間が私に好意を持ってくれており、私を応援して、私を満足させるような地位を提供する用意があることを聞きました。会話は長く続きました。私は自分の決意の内容を、強く正確な言葉で次のように説明しました。私はこの〔ロックンガム〕派と共に出発したこと、自分としては、考え方からも気持ちの上からも全く望んでいないにも拘らず、それが今や分裂した状態にあること、名誉は現在政権の外側にあること、提供される地位がたとえ気に入ったものであろうとも、それを受諾し、それを保持するには次の条件が充たされている必要があること。つまり、私自身政権の側にあるのではなく、政権の外側に属しているということが理解されていなければならないこと、したがってもし彼らが野党の立場を鮮明にするならば、私は職を辞して彼らの党に加わらなければならないこと。……それに対して彼は、このような条件では皆がっかりするかもしれないと言いました⁽³⁹⁾。」

ロックンガム派と運命を共にするというバークの決意は、アイルランドから戻ってから確固たるものになった。しかもそうした決意は、11月17日のエッジカムの解任問題を契機として、一層揺るぎなきものになっていった。けだしすでに述べたように、チャタム内閣は「市松模様のように極端に入り組んだ内閣」であり、ロックンガム派も何人かの議員をその中に送り込んでいたが、オールド・ウィッグを自称し、党派色の強いロックンガム派の者に対してチャタムは極めて冷淡であったのである。そしてその最たるものが、ロックンガム派のG・エッジカム（George Edgcumbe）の罷免に他ならなかった。すなわち、11月17日にチャタムは前内閣の時から Treasurer of the Household の地位にあったエッジカムを突然解任し、その後任として、「小平民」（the Little Commoner）と渾名される⁽⁴⁰⁾ほどまでにチャタムに忠実なJ・シェリ（John Shelley）を任命したのである。もっとも、エッジカムには国王寝所付き侍従のポストが準備されていた。しかしそれは明らかに降格であり、したがってこうしたチャタムの態度は、エッジカムのみならず、ロックンガム派の面々を憤慨させずにはおかなかった。そこでロックンガム派の主だった者十数名は、直ちに会合を開いて協議し、チャタムへの対抗策として、ロックンガム派の閣僚4名の辞任を決議したのである。しかしそうした策も功を奏せず、遂にロックンガム派は、完全野党を決意して、チャタム内閣からの総引き揚げを断行したのであった⁽⁴¹⁾。

これはロックンガム派にとって危機的な事態であった。しかし同時にこれは、ロックンガム派が政党として形成・発展していく上に極めて大きな契機となるものであった。というのもロックンガム派は、これ以降反対党としての姿勢を鮮明にし、完全野党としての立場を貫

くことによって、統一性と原則性を備えたロッキンガム・ウィッグ党へと成長していくことになるからである。そしてパークも、まさにこのエッジカム事件を契機として、ロッキンガム派との結びつきを一層強め、党と運命を共にするという決意を揺るぎなきものとしていたのであった。彼はこう語っている。「最初私は偶然にこの党に入りました。その後自由になった時、私は知識と熟慮によって再度入党し、原則と経験に基づいて、党と結びつくようになりました⁽⁴²⁾。」我々は、ここにパークの政党人としての歩みの開始を見て取ることができる。彼はここにおいて真の意味でのロッキンガム派の一員となったのであった。そして彼は、やがてロッキンガム・ウィッグ党のイデオログとして、ロッキンガム派の立場を理論化するとともに、その弁護論を積極的に展開していくことになるのである。

注

- (1) *A Short Account of a Late Short Administration*, 1766, in *Writings*, vol. II, pp.54-55.
- (2) *Ibid.*, pp.55-56. 鶴田正治「パークと1766年体制」(『史学研究30周年記念論叢』広島史学研究会, 第77・78・79合併増大号, 1960年), 590頁, 同『イギリス政党成立史研究』(亜紀書房, 1977年), 210頁参照。なお、林檎酒税と港湾開港条例の問題が下院で取り上げられた時、パークも登壇して演説を行なっている。Cf. Burke to Charles O'Hara (11 March 1766), *Correspondence*, vol. I, p.244 ; Burke to Charles O'Hara (8 April 1766), *ibid.*, p.248.
- (3) Burke to Charles O'Hara (23, 24 April 1766), *ibid.*, p.252. Cf. Charles O'Hara to Burke (15 April 1766), in Hoffman (ed.), *Edmund Burke, New York Agent*, p.344.
- (4) Alison G.Olson (ed.), "The Duke of Richmond's Memorandum, 1-7 July 1766," *The English Historical Review*, vol.LXXV (July 1960), p.479.
- (5) ロッキンガムは、閣議への出席さえ忘れていたことがあったばかりか、議会で演説したのも、首相在任中、1766年1月20日と5月28日の僅か二回しかなく、それも野党から野次られて仕方なしに行なったものであった。Cf. Langford, *The First Rockingham Administration*, p.20 ; Idem, "The Marquis of Rockingham," in Herbert V. Thal (ed.), *The Prime Ministers : Sir Robert Walpole to Sir Robert Peel* (London : George Allen & Unwin Ltd.,1974), pp.130-31 ; 小松『イギリス政党史研究』, 168頁参照。
- (6) Chesterfield to his Son (15 July 1765), *The Letters of Chesterfield*, vol.VI, p.2658.
- (7) Newcastle to C. Yorke (29 July 1766), Langford, *The First Rockingham Administration*, p. 236 ; Idem, "The Marquis of Rockingham," in Thal (ed.), *op.cit.*,p.131.
- (8) Newcastle to John White (28 June 1766), *A Narrative of the Changes in the Ministry, 1765-1767, told by the Duke of Newcastle in a Series of Letters to John White, M.P.* ed.by Mary Bateson (London: Longmans, Green & Co.,1898), p.72.
- (9) Cf. Langford, *The First Rockingham Administration*, pp.221-22 ; Hoffman, *The Marquis*, p.118. なお、チェスターフィールドはグラフトンの辞任に関してこう述べている。「グラフトン公が國務大臣の職を辞した時、彼は上院で辞任の理由を次のように説明しました。『自分は現在の閣僚たちの人柄や行動に対して全く異論はない。しかし、適切な行動を首尾よくとり続けていくためには、彼らは能力が欠けていると思う。彼らに力と安定性を与えることができる人物は一人しかいない(容易に想像できますように、それはピット氏を意味しています)。この人物の下でなら、自分は将官 (general officer) としてのみならず、先

- 発工兵 (pioneer) としても仕事をするであろうし、鋤と鍬を手取るであろう』と。」(Chesterfield to his Son [13 June 1766], *The Letters of Chesterfield*, vol.VI, P.2742.)
- (10) George III to Lord Bute (12 July 1766), *Letters from George III to Lord Bute, 1756-1766*, ed.by Romney Sedgwick (London : Macmillan, 1939), p.250.
 - (11) グラフトンが正式に辞任したのは5月14日である。
 - (12) Cf. Langford, *The First Rockingham Administration*, p.223.
 - (13) グラフトンの後任人事が難航したことについては, cf. *ibid.*, pp.223-24.
 - (14) Cf. George III to Lord Bute (12 July 1766), *Letters from George III to Lord Bute*, p.251. なお, リッチモンドについては, cf. Alison G.Olson (ed.), *The Radical Duke : The Career and Correspondence of Charles Lennox, third Duke of Richmond* (Oxford : Oxford University Press, 1961); Langford, *The First Rockingham Administration*, pp.238-39 ; Hoffman, *The Marquis*, p.122.
 - (15) Walpole, *Memoirs of the Reign of King George the Third*, vol.II, pp.239-40.
 - (16) ノージントン辞任の経緯については, Thomas, *British Politics and the Stamp Act Crisis*, pp.280-81 を参照されたい。
 - (17) George III to Lord Bute (12 July 1766), *Letters from George III to Lord Bute*, pp.250-51.
 - (18) George III to William Pitt (7 July 1766), *Correspondence of William Pitt*, vol.II, p.436 ; *The Letters of King George III*, pp.39-40.
 - (19) William Pitt to George III (8 July 1766), *Correspondence of William Pitt*, vol.II, p.438.
 - (20) ニューカスルは, 7月11日付のJ・ホワイト (John White) 宛書簡で, 国王とロッキンガムおよび閣僚たちとの会見の様態を詳しく述べている。Newcastle to John White (11 July 1766), *A Narrative of the Changes in the Ministry*, pp.79-81.
 - (21) Horace Walpole to Lady Suffolk (10 July 1766), *The Yale Edition of Horace Walpole's Correspondence*, ed. by W.S.Lewis (New Haven : Yale University Press, 1961), vol.XXXI, p.121.
 - (22) ピットの伝記および彼の政治的経歴や業績等に関する文献は数多くあるが, 差し当たり次のようなものを参照されたい。Earl Stanhope, *Life of the Right Honourable William Pitt*, 3 vols. (London : John Murray, 1879) ; Timbs, *Anecdote Lives of William Pitt, Earl of Chatham, and Edmund Burke* ; Walford D.Green, *William Pitt, Earl of Chatham and the Growth and Division of the British Empire, 1708-1778* (London : G.P.Putnam's Sons, 1901) ; D.A.Winstanley, *Lord Chatham and the Whig Opposition* (Cambridge : University Press, 1912) ; Williams, *The Life of William Pitt, Earl of Chatham*, 2 vols.; Frederic Harrison, *Chatham* (London: Macmillan, 1922) ; Owen A.Sherrard, *Lord Chatham : A War Minister in the Making* (London: The Bodley Head, 1952) ; Idem, *Lord Chatham:Pitt and the Seven Years' War* (London : The Bodley Head, 1955) ; Peter D.Brown, *William Pitt, Earl of Chatham : The Great Commoner* (London : George Allen & Unwin Ltd.,1978) ; Marie Peters, *Pitt and Popularity : The Patriot Minister and London Opinion during the Seven Years' War* (Oxford : Clarendon Press, 1980).
 - (23) Burke to the Marquess of Rockingham (21 August 1766), *Correspondence*, vol. I . p.266. ニューカスルも, 「現在少なくともチャタム伯は, 上院に移籍したために, 都会のみならず地方においても人気をかなり失ってしまっているようだ」と述べている。 Newcastle to John White (4 August 1766), *A Narrative of the Changes in the Ministry*, pp.97-98.
 - (24) Horace Walpole to George Montagu (10 July 1766), *Horace Walpole's Correspondence*, vol.X, p.222.

- (25) Newcastle to John White (20 July 1766), *A Narrative of the Changes in the Ministry*, p.83.
- (26) *Speech on American Taxation*, in *Writings*, vol.II, p.450. 邦訳〈『著作集』(2)〉, 60頁。
- (27) Horace Walpole to Horace Mann (23 July 1766), *Horace Walpole's Correspondence*, vol.xxii, p.441.
- (28) 主な新規入閣者を見ておこなれば、国璽尚書はチャタム伯、南部担当国務大臣はシェルバーン伯、海軍大臣はC・サウンダーズ (Charles Saunders)、大法官はカムデン伯 (1st Earl of Camden)、支払総監はノース卿とG・クック (George Cooke) であった。
- (29) *Speech on American Taxation*, in *Writings*, vol.II, pp.450-52. 邦訳, 60-61頁。
- (30) *Appeal from the New to the Old Whigs*, in *Works*, vol.IV, pp.117-18.
- (31) Burke to Charles O'Hara (19 August 1766), *Correspondence*, vol. I, p.265.
- (32) Cone, *Burke and the Nature of Politics : The Age of the American Revolution*, p.104.
- (33) このマーカム宛書簡の当該箇所を引用しておこう。我々が疑問符を付して読まなければならないのは、「それは単に私の心に浮かんだにすぎませんでした」という箇所である。「私は、ある重要な公職を立派に務め上げたということは、他の何にもまして人間の信用と権威を高めるものだということを、それほど知恵を働かさなくても知っていました。私は長い野党生活が予想できましたので、そうした公職への就任もそれなりの利益があるかもしれないと考えました。私はこのことを秘密にしておこうと思ったことはありませんから、貴方の方で自由に憶測して下さい結構です。しかし、この考えがいかにか気違いじみたものであろうとも、それは単に私の心に浮かんだにすぎませんでした。私はそれを一、二の友人に話して、あれこれ検討しました。その後間もなくして内閣が代わりました。それは確固とした計画ではありませんでしたので、ロッキンガム卿には全く話しませんでした。このことは卿もご存知です。これが私の気違いぶりのすべてです。」(Burke to Dr.William Markham [post 9 November 1771], *Correspondence*, vol.II, pp.269-70.)
- (34) Burke to John Wilkes (4 July 1766), *Correspondence*, vol. I, p.259.
- (35) クローガーの土地は、元来母方の実家であるネーグル家のものであったが、カトリック刑罰法のためにパーク家に権利委譲されたのであった。この点については、cf. Philip Magnus, *Edmund Burke : A Life* (London : John Murray, 1939), pp.336-37.
- (36) 例えば、次のようなものを参照されたい。Thomas MacKnight, *History of the Life and Times of Edmund Burke* (London : Chapman & Hall, 1858), vol. I, p.251f.; Magnus, *op.cit.*, pp.33-34 ; Cone, *op.cit.*, pp.107-108 ; Alice P.Miller, *Edmund Burke and His World* (Old Greenwich : The Devin-Adair Co., 1979), pp.69-71.
- (37) Mary Burke to Mrs.Hennessy (25 October 1766), *Correspondence of the Right Honourable Edmund Burke : Between the Year 1744, and the Period of his Decease, in 1797*, ed. by Charles William, Earl Fitzwilliam, and Sir Richard Bourke (London : Francis & John Rivington, 1844), vol.I, p.112 ; James Prior, *Life of the Right Honourable Edmund Burke*, 5th revised edn. (London : George Bell & Sons, 1884), p.98.
- (38) The Duke of Grafton to the Earl of Chatham (17 October 1766), *Correspondence of William Pitt*, vol. III, pp.110-11.
- (39) Burke to Charles O'Hara (post 11 November 1766), *Correspondence*, vol.I, p.279.
- (40) Walpole, *Memoirs of the Reign of King George the Third*, vol. II, p.266.
- (41) エッジカムの解任と、それに対するロッキンガム派の対応については、cf. Brooke, *The Chatham Administration*, pp.53-59 ; Hoffman, *The Marquis*, pp.137-41 ; O'Gorman, *The Rise of Party in England*, pp.129-90 ; 小松前掲書, 173頁参照。なお、ロッキンガム派の会合は11月19日と27日に開かれて

バークの政界登場とロックンガム派弁護論（II）

おり、バークは両日とも出席している。チャタム内閣から引き揚げたロックンガム派の閣僚は、上院議員4名、下院議員3名であるが、バークもオハラ宛書簡で彼らの辞任について報じている。Burke to Charles O'Hara (27 November 1766), *Correspondence*, vol. I, pp.280-81 ; Burke to Charles O'Hara (29 November 1766), *ibid.*,pp.282-83.

(42) Burke to Dr.William Markham (post 9 November 1771), *ibid.*,vol.II, p.263.

〈付記〉 本稿は、1991年度岐阜教育大学研究助成による研究成果の一部である。